

御土あれこれ

第14号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市二宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

二宮神社境内出土の中世瓦をめぐって — 鎌倉時代末期を中心に —

府中郷土の森博物館学芸員 深澤靖幸

市内にある二宮神社には、たくさんの鎌倉～室町時代の瓦が収蔵されています。その多くは、1970年と1972年に行われた境内の発掘調査で出土したものです。しかし、調査当時、中世の瓦に対する研究は僅かで、年代など多くの課題が残されていました。

中世瓦の研究は近年になって飛躍的に進展しています。奈良や鎌倉にある大寺社の瓦の調査研究が進んだこと、発掘調査が頻繁に行われるようになって各地で出土例が増加したためです。瓦礫といえば役に立たない物の意ですが、今、瓦は意外なほどさまざまな過去の事柄を語りかけてくれるのです。今回私たちは、二宮神社から出土した瓦を悉皆的に調査する機会に恵まれました。総数1,100片余り、240kgに達する瓦から、私たちが聞き取った事柄のいくつかを紹介したいと思います。

1. 出土瓦の年代と二宮の領主

二宮神社では、軒丸瓦（のきまる 笠瓦とも）、軒平瓦（あぶみ 宇瓦とも）、丸瓦（のきひら 男瓦とも）、平瓦（のき 女瓦とも）、鬘斗瓦、鬼瓦など、複数種類の瓦が出土しています。これらの瓦は粘土や焼成の特徴から5つのグループ（Ⅰ～Ⅴ群）に分けることができ、製作技法や軒丸瓦・軒平瓦の文様などを検討した結果、次のような年代を推測しました（第1図）。

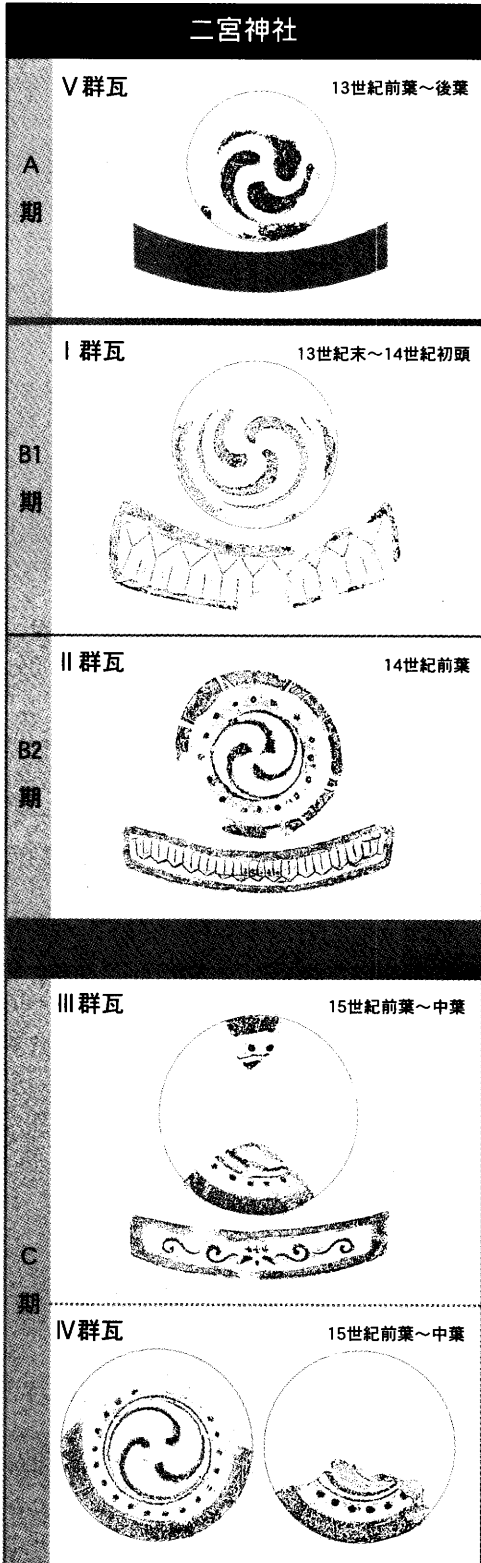
- V群瓦 13世紀前葉～後葉（A期）
- I群瓦 13世紀末～14世紀初頭（B1期）
- II群瓦 14世紀前葉（B2期）
- III群瓦・IV群瓦 15世紀前葉～中葉（C期）

このように年代の異なる瓦が出土するという事は、当然のことながら、それぞれの年代に瓦葺き建物の造営ないし修理が行われたことを意味します。近年、中世瓦の出土遺跡が増加しているとはいえ、複数時期の瓦が出土している例は僅かですから、二宮神社の中世における隆盛を偲ぶことができます。そのうえ、中世の二宮に関しては文献や記録類から、中世前半には小川氏、14世紀半ばすぎからは大石氏が領主であったことが知られています。瓦の年代からすると、A～B期が小川氏の段階、C期が大石氏の段階に相当します。小川氏は武蔵国衛の在庁官人出身で、武蔵七党の一つ西党に連なる一族、大石氏は関東管領山内上杉氏の宿老で、武蔵国の守護代を歴任した一族です。こうした名族が二宮の地を領有したことが、度重なる瓦葺き建物の造営を可能にしたと考えてよいでしょう。

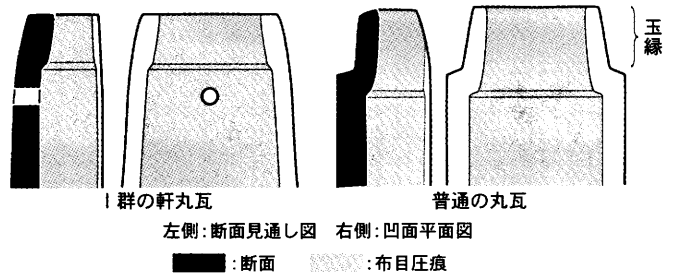
2. 屋根の景観を復元する

このように複数の時期にわたる瓦について、つぶさに述べていく紙幅は、残念ながらありません。以下では、私が特に興味を持った、13世紀末～14世紀初頭の瓦（B1期・I群瓦）を主に取り上げたいと思います。まずは、屋根の景観を復元してみましょう。

瓦の調査に着手してまもなく、私たちは特殊な形状の瓦の存在に気がきました。I群瓦の軒丸瓦に、玉縁と呼ぶ部分がないのです（第2図）。普通、軒丸瓦は軒平瓦とともに軒先を飾るのに使われます。玉縁は後方に重なる丸瓦を受ける部分で、これがなければ当然後方に丸瓦



第1図 軒丸瓦・軒平瓦編年図 (S=1/6)



第2図 軒丸瓦の狭端部の模式図

を重ねて屋根を葺きあげていくことはできません。I群の丸瓦は通常通り玉縁を作り出しているのに何故か。

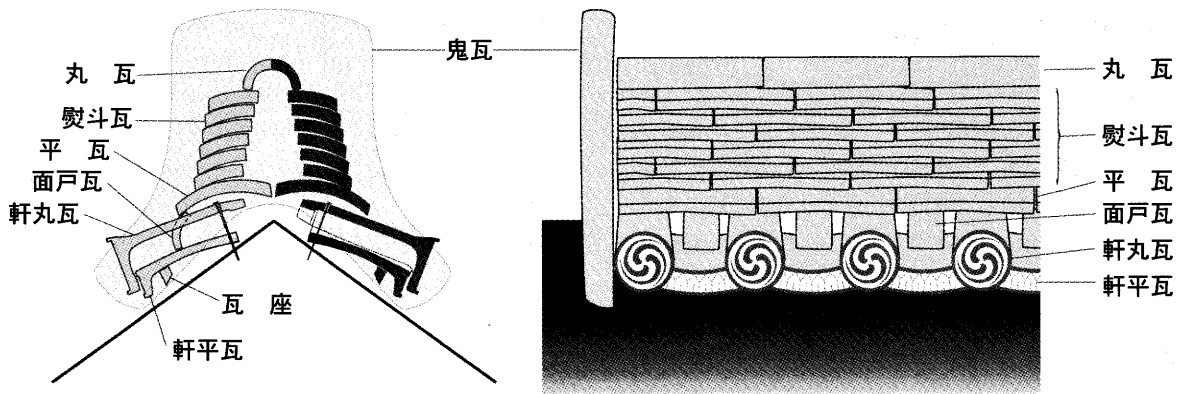
そこで、出土している瓦の個体数を求め、種類毎の比率を割出してみることになりました。個体数を算出する方法はいくつかありますが、複数の方法を併用しました。例えば、丸瓦の場合、破片の総重量は9.4kg、1枚は約1.75kgでしたから、5.4枚分の破片があることになります。また平瓦では、破片のなかから四隅の数をカウントしたところ97個あったので、これを4で割った24.25枚が出土している計算です。その結果、軒丸瓦18枚、軒平瓦7枚、丸瓦5.4枚、平瓦24.25枚、熨斗瓦9.5枚となりました。屋根全体を瓦で葺いた場合、平瓦と丸瓦の比率が圧倒的に高くなりますから、I群瓦の比率は明らかに異常です。この比率から導き出される屋根景観は、第3図に示したように大棟の部分だけに瓦を用いたとさえいえるを得ません。中世の絵巻物にも描かれている、葺棟いらかと呼ばれるものです。この葺き方であれば軒丸瓦の玉縁は無用の長物ですから、玉縁がないことも合点がいきます。

ただ普通は、葺棟の場合でも玉縁付の軒丸瓦が使われています。二宮神社出土のI群瓦が独創的な形を採った理由は定かではありません。

3. 瓦が作られたのはどこか

それではこのI群瓦はどこで焼かれたものなのでしょうか。

この問題はI群瓦の軒平瓦の文様が大きな手がかりになります。上向き剣頭文けんとうもんと呼ばれる文様で、類似する文様の瓦が埼玉県の比企郡一帯（都幾川村・玉川村など）を中心とした各地に分布しているのです。これらの瓦は文様ばかりではなく、粘土や焼成、製作技法にいたるまでよく似ていて、同じ産地の製品と考えられるものです。瓦を焼いた窯跡こそ発見されていませんが、分布の濃密な比企郡域での生産は間違いのないでしょう。二宮神社I



第3図 葺棟の推定復元図

群瓦は、直線で30km以上離れた比企地方から運ばれてきたものなのです。

4. 造営の背景

この時期の比企地方産の瓦はおよそ30ヶ所で出土しています。その広がり、南は府中市大国魂神社、北は栃木県足利市の榊崎寺にまで及んでいます。現在、武蔵国内で確認されている中世瓦の出土地は100ヶ所ほどですから（第4図）、比企地方での瓦生産はこの時期に隆盛を極めたといつてよいでしょう。つまり、この時期、瓦を用いた寺社の造営は、二宮神社に限ったことではなく、武蔵国内でブームに近い現象となっていたのです。

実は、I群瓦の年代として推測した13世紀末～14世紀初頭ごろは、全国的に寺社の造営や仏像の制作が活発化する時期です。そしてその背景は、蒙古襲来とこれに伴う異国降伏祈禱きとうにあるといわれています。蒙古襲来といつかつてない脅威に、人々は神仏にも助けを求めたのです。武蔵での瓦葺寺社の造営ブームも、こうした社会情勢がもたらしたものと考えてよいでしょう。

ただ注意しなければならないのは、瓦を用いた寺社造営が全国的に活発化したわけではないということです。瓦葺きの寺社造営が武蔵で活発化した理由は、別に考える必要があります。

この点は、鎌倉での瓦需要の増大が関係しそうです。最近の鎌倉の研究結果では、13世紀半ばすぎまでは遠隔地からの供給に頼っていたのに対して、13世紀末頃からは鎌倉近傍で生産されたと思われる瓦群が出現し、複数の寺院や武家屋敷に供給する体制が成立するといえます。つまり、13世紀後半に、首都・鎌倉をめぐる瓦生産の体制は大きく改編されるのです。

周辺地域がこの影響を受けないはずはありません。特に武蔵は、埼玉県美里町の水殿瓦窯跡のように、鎌倉に供給した生産地を抱えていましたから、大きな改編を余儀なくされたと想像できます。武蔵での改編を具体的に説明できる段階には達していませんが、こうした生産体制の改編と、蒙古襲来という列島規模の社会変動があいまって、この時期、武蔵での瓦葺き寺社の造営が活発化したのではないのでしょうか。

5. 蒙古襲来と二宮

ところで、二宮神社と領主である小川氏が、蒙古襲来や異国降伏祈禱と密接に関係していることは見逃せません。

『吾妻鏡』によれば、正安3年（1301）8月、幕府は出現した彗星の放つ穢れから国土を護るため、「天下泰平御祈禱」を諸国の一宮・二宮及び国分寺以下の大寺社に命じています。彗星の放つ穢れとは、蒙古襲来にほかなりません。二宮神社も諸国の主要寺社のひとつとして、異国降伏祈禱を行ったと考えてよいでしょう。

こればかりではありません。一般に文永・弘安の役が蒙古襲来の代名詞となっていますが、その前後にも数回の侵攻があり、蒙古との緊張関係は長く続いていました。その一つ、正安3年（1301）11月の襲来は、小川氏の支族が地頭の薩摩国（鹿児島県）甑島こしきしまが舞台でした。戦闘が行われた形跡はないものの、軍艦1艘が着岸し、約200艘が海上に出現、知らせを受けた幕府は12月に異国降伏の祈禱を全国の寺社に命令しています。同族が直面した難局に、二宮を領有する小川氏も大きな危機感を抱いたに違いありません。二宮神社においてはより切実に祈禱が執行され、その恩賞として社殿の造営がなされた可能性も十分にある、と考えたいところです。

6. 瓦から見た寺社間のネットワーク

最後に、二宮神社と大国魂神社の関係にも触れておきたいと思います。多摩川流域では、I群瓦と同じ比企地方産瓦は、府中市大国魂神社、国府八幡神社、高安寺、八王子市旧由木神社、昭島市拝島大日堂下遺跡、青梅市御嶽神社で出土しています。このことは多摩川流域においても13世紀末～14世紀初頭において比企型瓦が最も優勢なシェアを占めていたことを示しますが、中世の瓦は多分に政治的・宗教的な性格を含んでいましたから、これら寺社間に何らかのネットワークが存在したと考えてよいでしょう。

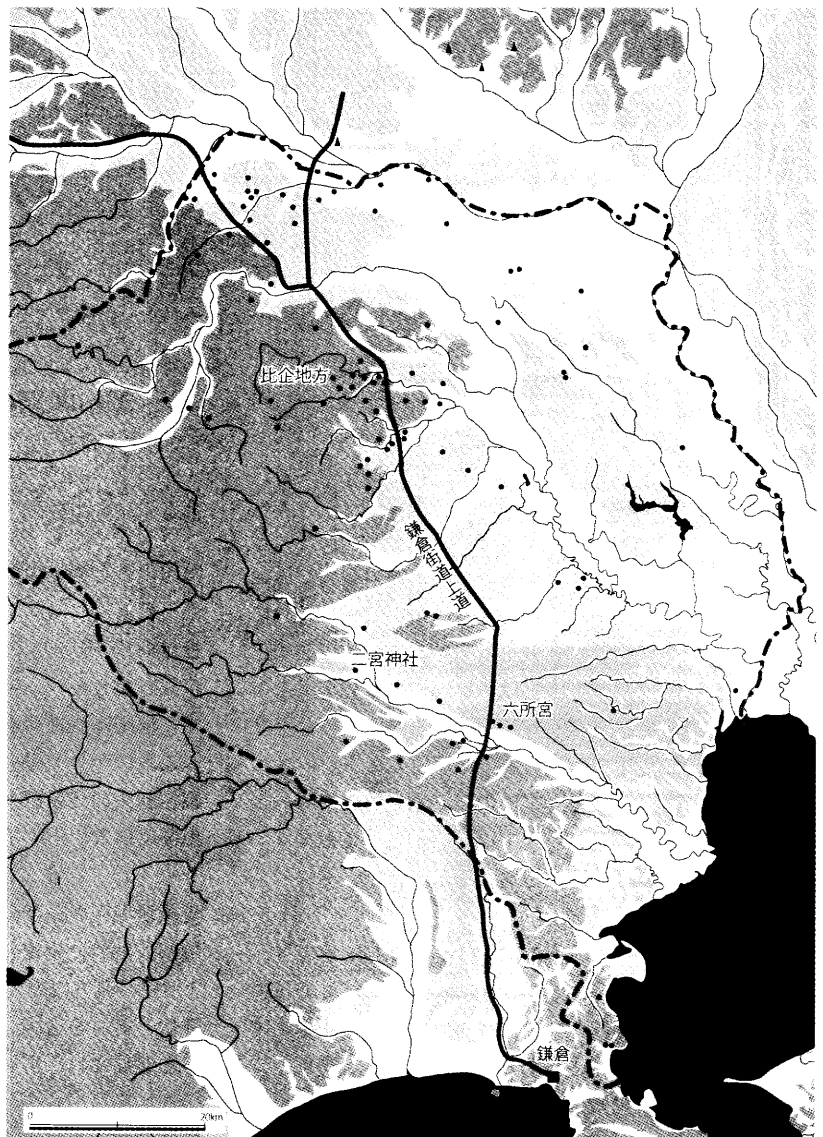
これら寺社の当期における位置付けは必ずしも明確ではありませんが、その中核が大国魂神社であることはまず間違いありません。大国魂神社は六所宮と呼ばれた武蔵国の惣社であり、武蔵の宗教的な中枢でした。その動向は、周辺寺社に大きな影響を及ぼしたと考えてよいでしょう。実際、六所宮とその周辺からは、比企地方産の瓦のみならず、中世を通じた多彩な瓦が出土しています。

とりわけ六所宮と二宮神社の関係は緊密だったようです。軒丸瓦や軒平瓦の文様は、木製の型（范）に粘土を詰めて、文様を写し取るのですが、二宮神社I群の軒平瓦と同じ型で製作されたものが六所宮で出土しているのです。加えて、II群の軒平瓦と同じ型で製作されたものも出土しています。II群瓦は14世紀前葉（B2期）と推測できるものですから、六所宮と二宮神社は、二度にわたって同じ時期に造営事業を行っているのです。そもそも六所宮は国内の主要な6社を合わせ祀った社で、その一つが二宮神社でしたから、六所宮と二宮神社との緊密な関係は当然といえます。さらに、国衙の在庁官人の系譜を引く小川氏が二宮を領

有していた点も、大きく影響していると考えてよいでしょう。

このように、二宮神社の瓦は、在庁官人層を媒介とした惣社と国内主要神である二宮神社の緊密さを裏付けてくれる貴重な資料なのです。

以上、二宮神社出土瓦が語ってくれた事柄を駆け足で紹介しました。瓦はもっと多くのことを語ろうとしていますが、今の私たちにはその全てを聞き取れる能力はありません。なお一層の研究の進展に期待したいところです。



第4図 武蔵における中世瓦の出土地